

Go Down, Moses : 「黒人解放」と南部白人意識

河崎, 妃奈
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6788779>

出版情報 : 九大英文学. 40, pp.213-230, 1997. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



Go Down, Moses — 「黒人解放」と南部白人意識

河 崎 妃 奈

序

William Faulkner生誕100年。20世紀アメリカ文学を代表する作家の一人として、フォークナーは今なお多くの研究家たちを魅了している。彼は終始一貫してアメリカ南部に執着し、南部をテーマにした作品を精力的に創作した。極めて地域的な作品でありながらも、その主題が生み出す象徴的、暗喩的世界は、アメリカという地域を越えた多くの人々に受け入れられている。

アメリカ南部といえば、南北戦争敗退という苦い経験をしている。この内戦は経済的な思惑から生じたことなのだが、複雑な政治的な利害関係によって人種問題をも含めた人道的な戦争に発展していった。1863年の北部による奴隷解放宣言は南部に大きな爪痕を残し、それ以後の南部社会に大きな影響を与えた。多くの奴隷の労働を基盤とする経済は打ち崩され、戦前にはうまく秩序立っていた社会も崩壊されてしまう。南部白人奴隷所有者たちにとっては北部の行為は権威的で理不尽なものにほかならず、それは彼らを古きよき時代のオブセッションと人種偏見の色濃い保守的な意識に凝り固まらせてしまうのだった。戦後、南部は奴隷解放による新たな社会の再建をめざすどころか、対北部、対黒人の姿勢を打ち出し保守的な世界として再出発をする。クー・クラックス・クラン（白人至上主義）などのラディカルな白人たちの台頭、公共施設の黒人と白人の線引きは、それを明確に示すものであり、南部のsegregationの問題をさらにエスカレートさせるものとなった。そのような人種間の問題は、黒人たちによる「公民権運動」の形を取るまでアメリカの恥部として存続する。そしてそれが南部だけの問題ではなくアメリカ全体

の問題として政治的なものになっていく時、南部は再び、「南北戦争」による敗北の後遺症を蘇らせるのであった。

このような南部の人種的な問題が多くのアメリカの作家たちに影響を与えていることは言うまでもない。*Faulkner's "Negro"* の著者である Thadious Davis は次のように言っている。“To talk about South is to suggest the Negro ; the two collectively, in achievement and despair, are irrevocably joined.”¹ フォークナーと同時代のアメリカ作家たちにとって「南部」を語るということは、必然的に「黒人」が伴うものであり、「黒人」を語らずして「南部」を語ることができなかった。実際に、フォークナーの作品の中にも多くの印象的な黒人たち、あるいは混血が登場している。

しかし、この彼の描く黒人像と黒人問題に対する政治的な態度の関係は、慎重に取り扱わなくてはならない。Thadious Davis は同書の中ではっきりと述べている。“[H]is intention is to write about people, to create people. His primary intention is not to provide sociological treatises on race and color.”² 同様に、Irving Howe もその著書 *William Faulkner : A Critical Study* において、フォークナーは黒人の問題に関して政治的な態度は表明していないと言っている。³ フォークナーは黒人を、南部を描くための“an essential element”として、そして南部文化における“a major force”として捉え、芸術的な側面から彼等を描き出しているというのである。しかしながら、社会的コンテクストが南部に設定されているだけに、フォークナーの黒人に対する“real feeling”というものに焦点があてられ論じられてきたのも事実である。彼の描く「黒人像」について社会的な研究が繰り返され、フォークナーのraceについての見解が様々に解釈されているのである。

私はフォークナーの描く黒人像と彼の黒人についての社会的な見解は慎重に取り扱い、あくまでも彼の描く黒人たちは彼の芸術的産物として捉えなければならないと考える。それを踏まえたうえで、1942年に発表された *Go Down, Moses* に焦点を当てていきたい。これはフォークナーの作品上、初めて主題が「南部の黒人の解放」に向けられている。Isaac McCaslin という南部白人による南部の悪の犠牲となった黒人に対する贖罪行為とその限界が、まさにその主題を形成しているのである。また、タイトルが“Go Down, Moses”

という黒人霊歌を意識してつけられていることや、作品が彼に幼少の頃から変わらぬ愛を注いでくれたMammy Caroline Barr に捧げられていることから、作品に何らかの形で「南部黒人の解放」が描かれているのではないかと考える。

それでは『行け、モーセ』に見られるその主題はどのように表れているのであろうか。第一章ではアイザック・マッキャスリンの人物像について考察し、第二章では黒人系マッキャスリン家の系譜を追っていき、その結末とも言える“Go Down, Moses”に焦点をあてて、「黒人の解放」について考察してみたいと思う。

I

『行け、モーセ』は 次のような記述で始まっている。

Isaac McCaslin, ‘Uncle Ike’, past seventy and nearer eighty than he ever corroborated any more, a widower now and uncle to half a county and father to no one...⁵

この序文によって読者はこの作品をアイザック・マッキャスリン（アイク）の話として捉えようとするだろう。しかしそれはすぐに裏切られることになる。というのは、すぐ次の文で、“this was not something participated in or even seen by himself...” (3)とこの序章には登場していないことが述べられ、また、その後第4章に至るまでアイクは登場して来ないからである。フォークナーが序文でアイクについての言及をしたのは、アイクが彼の家系図、すなわち黒人系と白人系という二つの系統を持つ同じ血を分けた家系を構成する上で、直属の相続人という重要な役割を果たしているからであろう。しかし、アイクの話だけではこの小説を半分しか理解したことになる。アイクと同様にもう一つの家系である黒人たちの話によって、『行け、モーセ』の理解は完全なものになるのである。それでは、アイザック・マッキャスリンとはどのような人物として描かれているのか。

先にも延べたように、アイクは第4章の“The Old People”に初めて登場する。10歳になったアイクは彼の尊敬していた大人たちとともに狩りに行くことを許される。そこで彼は森に生きる自然人として真の狩人の精神を学び、成長していく。彼の獵師としてのイニシエーションは12歳の時、自分でしとめた牡鹿の鮮血で「洗礼」を受けることによって始まる。

The boy did that—drew the head back and the throat taut and drew Sam Fathers' knife across the throat and Sam stooped and dipped his hands in the hot smoking blood and wiped them back and forth across the boy's face. (164)

そして、その時のアイクの気持ちは後の“Delta Autumn”の中で述べられている。“*I slew you; my bearing must not shame your quitting life. My conduct forever onward must become your death;...*” (351) このように命の大切さを学び、むやみに殺すものではないというインディアンの方則、自然の方則をSam Fathersから学ぶ。そして、真の狩人として生きることとを教えられ、その後のアイクの信条となる謙讓、憐れみ、寛容、忍耐の精神をサムから受け継ぐのである。

彼を真の狩人に成長させたものは、このようなサムとの密接な結びつきと、さらに森に住む大熊の存在であった。“Old Ben”と呼ばれる大熊は、“a phantom, epitome and apotheosis of the old wild life” (193) というほど、狩りの仲間の間でもめったに見ることのできない特別な存在であった。しかし、そのような大熊に彼はサムより受け継いだ荒野の精神で、自分自身の力だけで遭遇する。そのシーンはとりわけ象徴的に描かれているが、アイクはまず文明の利器である銃砲を置き、さらに時空を表す時計と磁石を体から外す。そうして身一つになって初めて大熊に出会うことができるのであった。

この象徴的な体験は、サムの鹿の血による「洗礼」とともにアイクを真の狩人として成長させるものとなる。その後、サムのもとで自然人としての精神を学んだアイクも大熊と対決しなければならないという試練の時を迎える。それは文明による自然の破壊という象徴的なテーマとして捉えられているの

だが、⁶大熊と人間の壮絶な戦いによる人間の勝利は文明の勝利を表した。それと呼応するかのように真の自然人としてのサムが死に、鉄道が敷設され森が減少していく。他の狩人たちが森を離れていく中で、アイクはサムのただ一人の後継者、忍耐する意志と剛毅さ、謙譲さを持った猟師、すなわち、白人でも、黒人でも、赤色インディアンでもない、ただの人間として生きるものである。

そのようなアイクは21歳の時に自分の祖父の犯してきた数々の罪に直面する。彼はそれを南部白人としての意識で判断するのではなくて、サムによって受け継いだ南部を超越した「荒野の精神」でその罪の深さを自覚する。そして、不当な土地の売買、人身売買、近親相姦という人間として許すことのできない罪を犯してきた自らの祖父を恥じ、自分はそれに荷担しないという行為を選択することによって、その罪の直接の犠牲となった黒人たちに贖罪しようとする。それは、祖父の男系のただ一人の白人後継者としての地位を捨て、彼に譲られるはずの遺産を拒否するという行為によって達せられる。さらにアイクは、彼以外の祖父の直接の相続人であるが、黒人であるがゆえに何も譲り受けていなかった者たちに遺産を分け与えるという責任を全うする。アイクは土地や財産やすべてを拒否し、自らがその罪を贖うために老人の悪の責任を背負い込んだのである。たとえそれが「逃避においてさえ、彼は、あの邪悪な罪深い老人の悪性を、自分が恐れていたよりも多く身につけていこうとしたのだ。」⁷彼は祖父の悪を正し、消し去るということはできなくても、少なくとも子孫のために祖父の悪を振り捨てることができると信じたのである。そして、自らがイエス・キリストが人類の悪を背負って犠牲となったように、南部白人の罪の犠牲となって罪を償おうとするのであった。

このようなアイクの姿は、土地を所有することを嫌い、文明、そして南部文化から超越して生きたサム・ファーザーズ思想によって導かれたものである。アイクは南部白人の意識を超えた、白黒の別なく判断できる価値基準に従っていたからこそ、祖父の行為の悪性を認識できたのである。その価値判断によって導かれた贖罪行為は、人類の罪を背負って犠牲となったキリストに重ね合わされて、相続権の破棄という形になって現れる。すべての権利を破棄することによって、一身に祖父の悪性を背負い込み、その後の子孫に

南部の悪を受け継がせまいとするのである。

こうしてアイクの行為は、新しい南部の姿と黒人の真の解放を促したかに見える。しかしアイクは本当にキリストになりきれたのだろうか。アイクが80歳になろうかという頃に、彼は祖父の罪の再燃に直面する。それは彼が財産を放棄した時点で断ち切られたはずの罪、自分が背負って贖罪したはずのものであった。しかし、その行為は報われずに、McCaslin Edmondsの孫であるCarothers Edmonds (Roth) によって繰り返されるのである。彼は同じ血縁者である、James Beauchampの孫と関係を持ち、彼女を「混血」であるという理由で捨てる。このようなロスに直面したアイクはどのような態度を表しているのか。

舞台はまさにアイクが森の精神をサムによって受け継いだ荒野である。アイクは昔の仲間たちの孫たちとともに狩りにやって来ていた。そこへ一人の女性が赤ん坊を連れてロスに会いにやってくる。アイクはサムの高貴な精神、憐れみ、謙譲、忍耐、寛容を受け継ぐたった一人の人間であったはずである。それは南部という地域を越えた精神であった。しかし、ロスを訪ねてきた女性が彼との子供を連れ、彼女が彼らの血縁者であり黒人の血を受け継いでいることを知ると、南部を超越した憐れみの精神を示すどころか、典型的な南部白人としての態度を表明するのである。彼は女性にロスから預かった金を渡して、次のように言う。

“That’s right. Go back North. Marry: a man in your own race. That’s the only salvation for you—for a while yet, maybe a long while yet. We will have to wait. Marry a black man.
(363)

このようにアイクは南部を離れて、同じ肌の色の男性と結婚するように繰り返している。アイクは人種雑婚を恐れる南部白人の意識に支配されてしまっており、肌の色を超えた人間的な愛を理解することができないのである。それはまさに混血女性の言葉に表れている。“Old man, have you lived so long and forgotten so much that you dont remember anything you ever

knew or felt or even heard about love?” (363)

結局アイクは黒人を人間として眺め、白人の悪を認識して白人の意識を超越して生きることはできなかった。まさに「黒人の解放」のための理想的な人物であったのだが、そうであり続けることはできなかったのである。このようなアイク像には、40年代のアメリカ南部の時代性が表れているように感じられる。次のフォークナーのインタビューは、1956年の2月に黒人解放運動について答えているものであるが、当時の南部人の意識を窺い知ることができる。“Now, I grant you that it is bad that there should be a minority people who because of their color don't have a right to social equality or to justice. But it is bad that Americans should be fighting Americans. That is what will happen because the Southern whites are back in the spirit of 1860...” このように、南北戦争から百年あまりの時が経っているにもかかわらず、未だに南部アメリカには“the spirit of 1860”が残っているということがわかる。黒人解放が北部主導で行われる限り、南部の白人たちは南北戦争以前の意識に遡り「対北部」の意識が働くというのである。このような白人意識が存在する限り、「黒人の解放」は望めないことであった。フォークナーが心配しているように、南部は再び戦争を起こしても自分たちの世界を守る構えであった。従って、そのような南部白人意識を知りすぎるほどに知っていたフォークナーは、南部で黒人解放が成功するための解決策は彼らに時間を与えることであると言っている。彼らが自ら罪を認識し、自発的に立ち上がる時まで待つべきであると言うのである。⁸南部が自発的に立ち上がるとは、南部が北部に対する“the spirit of 1860”を感じなくなった時であろうか。「デルタの秋」におけるアイクの言葉がそれを暗示している。ロスに会いに来た女性が黒人であるということを知ったアイクは、彼女に向かって次のように考える。“*Maybe in a thousand or two thousand years in America, he thought. But not now! Not now!*” (361) これは千年もしくは二千年の後の「南部と北部の区別のない」アメリカなら、白と黒の別なく結婚できる時が来るかもしれないということである。まさにそれほど途方もない時間をかけなければ南部白人意識は変わらないということである。フォークナー自身、それほど南部白人たちの南北戦争で受

けた後遺症が根強いことを知っていたのであろう。

従ってそのような南部白人たちの意識を考察する時、40年代の南部では「黒人解放」はまだまだ有り得ないことであって、黒人解放のための理想的な人間になりきれなかったアイクは40年代南部の現実を反映させていると言える。白人たちの強い「南部」に対する愛着が残る中で、南部白人が南部を超越した意識を持つことは理想でしかなかった。まさにアイクの贖罪行為の限界は、「南部の現実」を表しているのである。

それではこの『行け、モーセ』は、アイクを通して、「黒人の解放」は40年代南部においては不可能なことであるという絶望を表しただけにすぎないのだろうか。次に、もう一つの黒人の系譜をたどり、さらに南部における「黒人の解放」の可能性について考察してみよう。

II

アイザック・マッキャスリンの祖父に始まるマッキャスリン家の系譜は、アイクが直属の男系の子孫となる白人系マッキャスリン家と、祖父が買ってきた黒人奴隷Euniceとの間に娘をもうけることによってできる黒人系マッキャスリン(ビーチャム)家の二つに別れている。この黒人系マッキャスリン家の歴史は祖父の恥の歴史であると同時に黒人たちの悲劇の歴史でもある。

祖父Carothers McCaslinは一人の黒人女性を買い取る。彼女は「妻」として祖父の子供を身ごもり、娘Tomasinaを出産するが、彼女は黒人であるがゆえに捨てられ、その時祖父のもとで働いていた黒人男性にあてがわれる。この「人身売買」と黒人女性を「一人の女性」として扱わない祖父の行為は、自らの娘として生まれたトマシナをも自分の性欲の対象とすることによって最悪のものになる。ユーニス自分の娘を「夫」に、すべてをわかっていながら渡さなければならない悲しみに絶望して、自らの命を絶つ。その6ヶ月後に娘トマシナは父の子を出産し、その出産において死ぬのである。

『行け、モーセ』の第一章は、このキャロザーズ・マッキャスリンの白人系の双子の息子、BuckとBuddyとトマシナの息子、Tomey's Turl の嫁取りを題材にしている。この双子の兄弟とトミーのタールの関係は、“The Bear”

の第4章に至るまで明らかにはならないが、実は彼らは同じ父を持つ兄弟であって、その婚姻は一血縁家族の二つの系統の始まりとしての的確なテーマである。そして、トーミーのタールの子供たちがその次の章、“The Fire and The Hearth”と「熊」の第4章で詳しく述べられ、さらに彼の孫の代までが「デルタの秋」と「行け、モーセ」で語られているのである。

このようにして、この小説の中には壮大な黒人系マックスリン家の歴史が刻み込まれている。それはキャロザーズ・マックスリンという一人の白人の悪と二人の黒人女性の悲劇のうえに成り立った歴史であり、その悲劇は「黒い血」を受け継ぐ彼らの子孫たちによって代々繰り返される。「デルタの秋」に登場する名もなき混血の女性はトーミーのタールの曾孫にあたるわけだが、彼女は混血であるがゆえに男から捨てられ、近親者の子供を身ごもるというユニースとトマシナの悲劇を再燃している。それは絶望的で重苦しい印象を与えるが、もう一人の子孫にあたる、最末裔のSamuel Worsham Beauchampもまた悲惨な結末を迎えている。彼は最終章に登場し、モリーによって立派な形で埋葬される。それは全体を通して描かれてきた黒人の系譜の最末裔の葬儀であるために、非常に象徴的な性格を感じさせるものである。

最終章は次のようなサミュエル・ビーチャムの描写で始まっている。“The face was black, smooth, impenetrable; the eyes had seen too much.” (369)彼はシカゴの警察官殺しの罪で調査官から取り調べを受ける。彼の装いは立派なハリウッド風の服に、調査官ですら履くことのできないような立派な靴を履き、あまりにも金をかけすぎた代物である。そして、彼はこの調査の後に、無残にも立派な服を引き裂かれて殺されるのである。

彼はLuciusとMolly (Mollie)の孫としてジェファーソンで生まれる。彼の母は出産によって死に、父は息子を捨てて姿を消してしまう。従って、彼はモリーの手で育てられるのだが、19歳の時に彼女のもとを飛び出して町へ出て行く。その時から犯罪を繰り返して刑務所に送られ、ついには重い刑に処せられるのであるが、脱獄に成功してシカゴへと逃げ込むのであった。

このような南部を離れて北部へと移住していくサミュエルの姿は、多くの典型的な南部黒人の姿を表している。第一次世界大戦が大きな要因となって1910年代から30年代にかけて多くの黒人たちが南部から北部へと移動してい

った。しかし、彼らを待っていたのは南部と変わらぬ激しい人種差別であり、低賃金に喘ぐ苦しい生活であった。教養のない彼らにとって選択できる職業は限られ、住まいもゲットーと呼ばれる貧民街に押し込まれたのである。彼らが夢見た「自由」で「平等」の生活は北部の産業資本主義の中で無残にも打ち碎かれたのであった。彼らは工場のために安価で手に入る労働力でしかなかったのである。そんな彼らが手っ取り早く職に就き儲ける方法は不法な商売であった。サミュエルは調査官に職業を聞かれて“Getting rich too fast.” (370)と言っているが、まさにこれが黒人に許される場所であったのである。黒人による犯罪率の高さもこのような状況が生み出した結果である。多くの黒人たちにとって北部へ行ったからといって状況は何も変わらず、決して希望を与えてくれるような新天地ではなかったのである。⁹

サミュエルはそのような南部の犠牲であり、北部の犠牲の一人である。彼の死は一見、正当な法の裁きによって執行されたようであるが、Gavin Stevens がモリーに真実を隠していることから、リンチによって殺されたことがわかる。北部と言えども南部と変わらぬ仕打ちが黒人たちを待ち受けていたのであった。まさに、サミュエルは南部社会からやって来た下層階級の黒人の悲劇を体現している。

サミュエルはマッキヤスリン家の最末裔の子孫にあたる。彼の死は「アメリカ南部黒人の悲劇」の結果であり、同時に「黒人系マッキヤスリン家の悲劇」の結果なのだが、その彼が立派な形で故郷、南部へと連れ戻され埋葬される。悲劇の発祥の地であるジェファーソンへ連れもどされ埋葬されるということは、象徴的なレヴェルにおいて南部の歴史、すなわち黒人の悲劇の歴史への終止符を表しているように感じられる。サミュエルはマッキヤスリン家の最末裔として、祖父に始まる数々の南部白人による罪の歴史を一身に背負うにふさわしい人物である。彼が立派な形で「埋葬」されることによって、白人たちの贖罪と黒人の「歴史からの解放」が象徴されているのである。イエスが人類の罪を一身に背負って犠牲となったように、サミュエルは南部白人たちの悪行の歴史による犠牲として、南部黒人のための「スケープゴート」として捉えることができる。いわゆる象徴的イエス・キリストなのである。

さらに、サミュエルがマッキヤスリン家の最末裔として、歴史を清算する

ための「スケープゴート」と捉えられるなら、そのサミュエルを埋葬し、清算することを主張したモリーには「解放者」としての象徴性が備わってくるのではないだろうか。南部の悪を一身に背負ったサミュエルの埋葬は、それを「立派」な形で行うことによって南部の歴史の埋葬、新たな「黒人の歴史」の出発点を表している。モリーはそれを提唱した人物として黒人のための「解放者」、モーセとして考えられるのである。このモリーをモーセ像として捉えることで、次のような解釈も可能になる。すなわち、モリーが黒人であるということは、イスラエル人の解放はイスラエル人モーセによって行われたように、黒人の解放も「黒人」でなければ真の解放はありえないということを示唆しているのではないかということである。「黒人の解放」が成立するとするなら、それは黒人によるものでなければならないのである。

このような二人に象徴される世界は、南部における理想的な「黒人の解放」を暗示している。これはサミュエルがマッキヤスリン家の最末裔であり、立派な形で埋葬されているということに焦点を当てて読むことによって考察されるものである。しかし、現実的なアイクの姿、南部の立場を知った後では、このような象徴的な読みは、あまりにもそぐわない、正反対の捉え方のように感じられる。黒人の悲劇の歴史を背負って「スケープゴート」となり、新たな歴史を創造するという象徴的な読みが可能なほど南部の歴史は寛容なものではなかったはずである。

しかし、このような「黒人解放」の象徴性を補強するかのように、黒人に協力的な白人像が同じ最終章に表れている。その白人像はあまりに理想的なものであるのだが、この『行け、モーセ』の三章で、南部の典型的な白人の意識を描いた“Pantaloon in Black”と比較することによって、それがよりはっきりと把握できるだろう。

ある白人保安官が一人のリンチによって処刑された黒人男性Riderの行動を妻に話して聞かせる。彼によればライダーの行動は全く理解に苦しむものであり、「奇怪」以外の何物でもない。彼は次のように話し始めている。

“Them damn niggers, I swear to godfrey, it's a wonder we have as little trouble with them as we do. Because why?

Because they aint human. They look like a man and they walk on their hind legs like a man, and they can talk and you can understand them and you think they are understanding you, at least now and then. But when it comes to the normal human feelings and sentiments of human beings, they might just as well be a damn herd of wild buffaloes...” (154)

彼は黒人を人間としては見ていない。まして彼らの人間的な感情に至っては「野牛」も同然というような捉え方をしていることがわかる。このように黒人を捉える限り、このリンチを受けたライダーの妻を亡くした悲しみの深さを理解することは不可能である。ライダーの行動は保安官から見れば、妻の墓に土を掻きいれ、次の日休暇を取ることなく職場に出てきて早退し、大量の酒を購入した後、賭博場へやって来て、白人の首を切り裂くという「訳の分からない」ものであったかもしれない。しかし、そこには最愛の妻を亡くしたライダーの虚無感、絶望感、そしてなにもものも癒してはくれない深い悲しみがあるのである。この白人保安官は、ライダーが妻を深く愛していたがために悲しみ、自暴自棄の行為に走らざるを得なかった心情を推し量ることはできない。黒人を「人間として」考えていないために、その「人間的な愛、悲しみ」を理解できず、ただ訳のわからぬ事件として片づけてしまうのである。さらには、彼が話をしている妻はまったくその事件に関心を向けていない。保安官補にとって理解不可能なライダーの事件は、妻にとっては全く考えるに値しない事件なのである。

この「黒衣の道化師」では、黒人を人間として見ていず、その人間的感情においては「野牛」も同然としか考えていない白人の意識を露にしている。そして、白人が黒人に殺されたとなると法的処置は全く無視され、刑務所から強制的に引きずり出してリンチで始末をつけるというのが、白人全体に浸透している考え方なのである。そこは、まるで容赦のない黒と白の優劣のはっきりした世界であり、この保安官夫妻は一般的な南部白人を体現しているのである。それでは最終章「行け、モーセ」の白人たちはどのように描かれているのであろうか。

その一人としてモリーが真っ先に相談するために訪れた白人弁護士、ギャヴィン・スティープンスを見てみよう。彼は*Light In August*にも登場しJoe Christmasの行動を「黒い血」と「白い血」に分けて分析しているが¹⁰、彼は「行け、モーセ」においては彼が悪の根元だと信じた「黒い血」を救済する人物となっていることがわかる。彼はモリーの言葉にしたがって、どこにいるかわからないサミュエル・ピーチャムの所在を調べ始める。そして、彼はすぐにサミュエルが警察官殺しの件で起訴され、「リンチによって」殺されていることを知る。彼がすぐに取った行動は、調べに協力してくれた新聞編集長のWilmothに頼んで、その記事を載せないようにする事であった。それは、すなわちモリーからその事実を隠すことによって、彼女の悲しみを軽減しようとする事であったのである。彼にはその事実をすぐにモリーに告げるつもりはなく、時間を経てそれとなく告げようと考えていた。しかし、あくまでもモリーの意志はサミュエルが死んだのなら、彼をジェファーソンの故郷へ立派な形で戻してやるということであった。それはMiss Worshamによってギャヴィンに伝えられるのだが、彼はその遺体を連れて帰るというモリーの意志を理解する。そして、葬儀の準備を始めるのである。

この葬儀もミス・ワーシャムが経済的な面倒をみたとは言え、ほとんどはギャヴィンの手によって整えられたものであった。彼は良心からミス・ワーシャムに嘘をつき、経済的な面倒を自分でみたのである。一人の「黒人」の葬儀に、自分の益にもならない金を一人の弁護士と新聞編集長が出し、そのうえ、町の住人からも金を集める。“It’s to bring a dead nigger home. It’s for Miss Worsham. Never mind about a paper to sign: just give me a dollar. Or a half a dollar then. Or a quarter then.” (378-79) と言っては、商店や事務所を渡り歩いて金を集めるのである。モリーの悲しみを理解することによって、彼はこのような金銭的援助へと駆り立てられているのである。

それから、ついに彼はサミュエルの死と向き合ったモリーに会いに行く。そこで彼はロス・エドモンズを責めるモリーに、彼の立場を弁護しようとするがはっきりとすることができずに部屋を出ていってしまう。そして彼は次のようにミス・ワーシャムに謝っている。“I’m sorry, I ask you to forgive

me. I should have known. I shouldn't have come.” (381) 彼は深い悲しみに襲われているモリーを真に理解することができない自分に来るべきではなかったと感じているのである。彼は、モリーに対してエドモンズを弁護しようとしたことを悔い、自分の思慮の無さを恥じているのである。これはギャヴィンのモリーに対する、モリーの人間的な愛の深さ、悲しみの深さの理解によって表れたものである。初めはサミュエルの死を後で告げればよいと思っていた程度の思いやりが、真に彼女の悲しみを理解できない者は軽はずみに会いに来るべきではないという理解に到達するほどになったのである。このようにギャヴィンはモリーのよき理解者として描かれているのがわかる。

同様にモリーの理解者として描かれているミス・ワーシャムを次に考察してみよう。彼女はモリーの仕える家の主人の娘であり、彼女らは姉妹のように育てられた。それはミス・ワーシャムがギャヴィンに自分たちは姉妹のように育ったのだと告げていることからわかる。そして、彼女はモリーが望むであろうことを把握し、悲しみを理解したうえで葬儀の手配をするのである。金銭的な援助も惜しまず差し出している。さらに、彼女が黒人であるモリーと人間的な差を感じていないということは次の言葉にはっきりと表れている。ギャヴィンが自分の来るべきところではなかったと謝った時に、ミス・ワーシャムは、“It's all right. It's our grief.” (381) と「自分たち」の悲しみであると言い放つのである。

この『行け、モーセ』の中には、このモリーやミス・ワーシャムとは逆に、白人と黒人の子供が共に育てられる場合において、必ず感じる何らかの「人種の差の自覚」がしばしば問題となって描かれている。それは、モリーの夫ルーカスとZachary Edmonds (Zach)、モリーの息子のHenryとロスの二世代にわたって繰り返し描かれている。ルーカスは自分の嫁をめぐって、ザックと対立するのであるが、その時の様子が次のように描かれている。

Then Lucas was beside the bed... He was kneeling, their hands gripped, facing across the bed and the pistol the man whom he had known from infancy, with whom he had lived until they were both grown almost as brothers lived. They had fished and

hunted together, they had learned to swim in the same water, they had eaten at the same table in the white boy's kitchen and in the cabin of the negro's mother; they had slept under the same blanket before a fire in the woods. (55)

このように幼少の時から兄弟のように育った仲でも、彼らの間に生じた肌の色の優劣を認識せずにはいられないのである。ルーカスはモリーのことで争った後に次のように言っている。“How to God, can a black man ask a white man to please not lay down with his black wife?” (59)

また兄弟同然に育ったロスとヘンリーの間にもある日突然、白人のプライドがロスを襲っている。

Then one day the old curse of his fathers, the old haughty ancestral pride based not on any value but on an accident of geography, stemmed not from courage and honor but from wrong and shame, descended to him. (111)

そして、ロスはこれまで一緒に眠ってきたヘンリーとともに寝ることを拒否してしまう。彼は説明できない苦悩、恥辱に襲われるが、それが彼の祖先から代々伝わってきている「傲慢」に過ぎなかったのであった。このように人種の差は重い苦悩となって両者の間に生じている。しかし、このミス・ワッシュムとモリーの間にはそのような隔たりが一切感じられない。彼女たちは他とは違って、まさに「姉妹」のようである。それは、例外的な関係であると言えるだろう。

最後に白人コミュニティについて考察しておかなければならない。これもまた同じようにモリーやサミュエルに対して「好意的な」側面だけが描かれている。この章にはサミュエルの葬儀に反対するものは描かれておらず、それが一人の黒人のためであるにもかかわらず、ギャヴィンの頼みに応じて寄付をしている人々がいる。たとえそれが取るに足りない寄付であったとしても、その行為自体は「黒人のため」のものであり南部ホスピタリティを表す

ものである。この敵対的でない、むしろホスピタリティに満ちた社会像は、最後のサミュエルの遺体を載せた車が町を出て行くシーンに顕著に見られる。町の人々（南部コミュニティ）が静かに見守る中でサミュエルを乗せた霊柩車が走り、その後をモリーとミス・ワーシャム、そして新聞編集長とギャヴィンを乗せた車が続くのであった。

このように最終章にはモリーの行為を静かに見守る好意的な白人像が描かれている。中にはもちろん寄付に参加していない白人たちもいたのだが、作品の前面に現れているのは「暖かい南部社会」である。サミュエルやモリーに表れている象徴性をバックアップするかのように人間味あふれる南部白人たちが登場している。それは現実的で辛辣な「黒衣の道化師」の世界と比較すると、まさに理想的なものであり、白人たちが黒人の協力を買ってでるという非現実的な「黒人の解放」への図式の現われである。また、先に考察したアイクの姿に現実の南部白人意識を見出した後では、あまりにも現実とかけ離れた世界であって、南部社会にはありえないことであると感じるのではないだろうか。それではこの「黒人解放」の象徴性とそれを後押しするような白人たちの姿はどのように捉えられるのであろうか。

南部白人たちの意識が戦後百年経っても「北部」に囚われていることは、フォークナーのインタビューから感じ取れた。そうである限り黒人の解放に協力するのは不可能である。従って、最終章の白人の姿は、南部人が南部人でなくなる時、すなわち北部という範疇が消える時の理想の「アメリカ人」として捉えることができる。未来の理想の姿である。しかし、「対北部」意識は戦後百年経っても消えないほど根強いものであるのだから、これではどれほどの年月がかかるのか予想もつかないほど「非現実的」である。アイクの言うようにそれは、千年も二千年もかかることであるのかもしれない。

それでは、これまで繰り返し述べてきた南部の「対北部」意識を反対に利用してみてもどうであろうか。つまり、最終章の白人たちの姿を、「北部」で犠牲となったサミュエルを手厚く埋葬し、魂を解放する「南部人」として捉えるのである。すると、最終章は単なる空想論ではない、もっとironicalな「南部の現実」として読むことができるのではないだろうか。つまり、この最終章は、南部人が南部人でなくなる時という理想的なものではなく、「南部人と

して」黒人解放を実現できるという現実的な可能性を示しているのではないかと考えるのである。それは一見矛盾するように感じられる。というのは、南部が南部でありつづける限り「黒人の解放」は不可能なことであると捉えてきたからだ。しかし、サミュエルの「葬儀」のように、北部の罪を南部が贖うという構図をとることによって、南部が抱き続けた「黒人解放」への「対北部」意識は消すことができるのではないだろうか。北部が行うのではなく、南部が自ら「北部も含めたアメリカ」の罪として、南北戦争以来、潰されてきた南部の誇りを傷つけることなく、黒人解放を進めることができるのである。このような、人種間の差別の問題はもはや南部だけの問題ではなく、それは北部のものでもあるという意識の確立によって、「黒人の解放」が可能となるのである。それが、最終章に表れている、南部白人たちのホスピタリティに満ちた姿である。この最終章の黒人解放への理想的な図式は、一見、南部人にとって空想論であるような世界なのだが、南部白人意識を考察する時、それは極めて政治的な意識が隠された「現実的な」世界なのである。

結

『行け、モーセ』はアイクを通して、解放を認められない南部の現実を描き出す一方で、それとは相矛盾する理想的な「黒人解放」の図式を描き出している。南部白人意識が存在する限り「解放」は時間を要するというアイクの態度を考察する時、そこには「北部」を意識せずにはいられないという「南部」の現実が窺える。この「北部」に対して根強く残る対抗意識を消し去って初めて南部の新しい姿が望めるのである。それが最終章の理想的な世界である。しかし、それには途方もない時間が必要であり、あまりに空想的である。むしろ、南部の「対北部」意識を消すのではなく、利用することによって「現実的な」南部世界として読むことができ、最終章が南部のironyとして浮かびあがる。“Go Down, Moses”はいわゆる、時間をかけて南部の意識を変えることによって獲得された「未来の理想的南部」ではなくて、政治的な意識操作によって到達できる現実的な南部を表わしていると捉えられるのである。

このように考察する時、この作品は黒人の歴史を通して南部の罪を露呈させ、最後に人道的な白人像を示すことによって、理想的な「黒人の解放」の姿を表しているにもかかわらず、人道的に解決されるはずの「黒人解放」が、結局は「政治的な」ものにほかならないということを表していると言える。

「解放」が「北部」意識に左右されるものであるならば、ギャヴィンやミス・ワーシャムが表している人間的な理解、「ホスピタリティに満ちた南部社会」は、南部に存在する政治的な意識によるものなのである。

これでは、南部において黒人解放を可能とするのは人道的な精神ではないようである。南部に根差した「黒人解放」に対する意識は、「人道的」精神を凌ぐものなのである。そこにはもはや「黒人問題」を政治的なレベルでしか解決できない南部の悲劇が表れていると言えるのではないだろうか。

注

¹ Thadious M. Davis, *Faulkner's "Negro"* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1983) 14.

² Davis 17.

³ Irving Howe, *William Faulkner: A Critical Study* (New York : Random House, 1952) のFaulkner and the Negroes を参照。

⁴ William Faulkner, *Go Down, Moses* (New York : Random House, 1942) 3. 以下、本書からの引用はすべてこの版により、頁数は括弧に入れ本文中に記載する。

⁵ 大橋健三郎著、『荒野と文明』（研究社、1965）参照。

⁶ ウィリアム・フォークナー、大橋健三郎訳、『行け、モーセ』、フォークナー全集16巻（富山房、1973）331引用。

⁷ これは1956年の2月27日にニューヨークにおいてRussell Warren Howe によって行われたインタビューの内容である。Arthur F. Kinney, *Go Down, Moses: The Miscegenation of Time* (New York : Twayne Publishers, 1996) の巻末に収められているAppendix IIIから引用。

⁸ アメリカ黒人の歴史については、本田創造著、『アメリカ黒人の歴史』（岩波新書、新版1991）参照。

⁹ William Faulkner, *Light in August* (New York : New Directions, 1932) 424-25.